

方] 明新社.

日本ムスリム協会 1982 『日亜対訳・注解 聖クルアーン』 日本ムスリム協会.

Lane, Edward William and Stanley Lane-Poole. 1984. *Arabic-English Lexicon*. Cambridge: Islamic Texts Society.

Shinmen Yasushi, Sawada Minoru, Edmund Waite (eds.). 2013. *Muslim Saints and Mausoleums in Central Asia and Xinjiang*. Paris: J. Maisonneuve.

(庄司 翼 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Zachary Valentine Wright. 2015. *Living Knowledge in West African Islam: The Sufi Community of Ibrāhīm Niasse*. Leiden: Brill. xviii+333 pp.

15世紀頃にカーディリー教団がサハラ西部に到達し、19世紀初頭にはティジャーニー教団もこの地に勢力範囲を拡大させるとともに、西アフリカにおいてスーフィズムが定着し始めた。18-19世紀間に生じた一連のジハード運動の展開のなかでは、イスラーム国家建設が目指された。他地域がヨーロッパ植民地勢力との邂逅のなかで近代化政策を推し進めたのは異なり、西アフリカでは19世紀末以降、スーフィー教団に属するイスラーム知識人が担い手となり、急速な「イスラーム化」が推し進められた。そして本書の対象とするイブラーヒーム・ニヤース (Ibrāhīm Niyās, 1900-1975年) は、間違いなくそうした人物のうちのひとりである。

近年、イブラーヒーム・ニヤースを対象とする本格的な研究書並びに学術論文が提出されている。その中でも、注目に値するのが、[Hill 2007] のセネガルの知的コミュニティを民族誌学的に叙述した論考と [Seeseman 2011] の丹念な文献資料の分析によって西アフリカにおけるスーフィーの思想的営為を明らかにした論考である。本書は両論考の延長線上に位置付けられる。本書は、イブラーヒーム・ニヤースを議論の軸として設定し、西アフリカにおけるイスラームの学問伝統である直接的な師弟関係を通して為されるイスラーム諸学の教授法が当該地域のムスリム・アイデンティティの形成に影響を及ぼしたことを明らかにしたものである。なお本書で度々言及されるコミュニティという用語は、主としてイブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団のことを指す。

著者 Zachary Valentine Wright は、カタルのノースウェスタン大学准教授を務めており、アフリカ史や現代中東史などの講義を受け持っている。また著者はイブラーヒーム・ニヤースの主著『封印アブー・アル＝アッバースの溢出から覆うことを取り除くもの』(Kāshif al-ilbās ‘an fayḍa al-khatm Abī al-‘Abbās) の英訳を手掛けており、今後の活躍が期待される新進気鋭の研究者のひとりである。以下、各章の概観に触れた後に、その議論の展開について述べることにする。

序章と第1章「西アフリカの歴史におけるイスラーム知識人コミュニティ」では、本書の議論の前提となる枠組みが提示される。まず西アフリカの学問伝統のなかで重要視されてきたイスラーム諸学のうちマールク学派法学、クルアーン学、秘教学 (‘ilm al-asrār)、スーフィズムについて論じた後に、当該地域における師から弟子へと直接的に受け継がれる知の伝統的特徴について考察が為されている。

第2章「新たなセネガンビアのイスラーム知識人コミュニティ」では、イブラーヒーム・ニヤースが出現するまでのニヤース家の歴史的背景とイブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団の特徴について論じられている。彼の父親であるアブドアッラーフ・ニヤース (‘Abd Allāh Niyās, 1922年歿) の時代は、マールク・スイ (Mālik Sy, 1922年歿) やアフマド・バンバ (Aḥmad Bamba, 1927年歿) といった優れたイスラーム知識人達が活躍した時代でもあった。彼らは積極的にイスラーム諸学の会得に努め、スーフィズムを通してイスラーム諸学に新たな意味合いを与えた。イブラーヒーム・ニヤースは、前の世代の知的遺産を受け継ぐことで、自身の教団の基礎の確立に役立てた。1929年に、突如イブラーヒーム・ニヤースは自身が神の恩寵 (ファイダ) の持主 (ṣāhib al-fayda) であると宣言し、全ムスリムに神の恩寵を与えることで、当該地域のムスリム・アイデンティティの強化に努めた。

第3章「尊崇される信徒達——サルムのスイセ家」では、イブラーヒーム・ニヤースから直接的に知的遺産を受け継いだアリー・スイセ (‘Alī Cissé, 1982年歿) が属するスイセ家の歴史的背景について論じられ

ている。スイセ家の系譜は、西アフリカにおける最古の系譜のひとつに数えられ、ガーナ王国の首都クンピー・サーリフを建設した Kaya Magha (黄金の支配者を意味する) と呼ばれる王にまで遡ることができるとする。それ故に、スイセ家の有する偉大な系譜が、イブラーヒーム・ニヤースを祖とする教団の拡大に大きな影響を与えたことを指摘している。さらにイブラーヒーム・ニヤースが後継者指名に偉大な系譜を持つアリー・スイセを指名したことで、同教団が今日でも影響力を保持することができたとする。

第4章「神を知ること」では、イブラーヒーム・ニヤースのアラビア語著作群と口頭伝承資料から同教団における神の認識(マアリファ、Ma'rifa)の会得について概観する。神の認識を得る際に、信徒達はこの教団の特徴のひとつとされる宗教教育(タルビヤ、tarbiya)を受ける。当該地域のムスリム達の間で神の認識を求める声が次第に高まっていく。

第5章「スーフイーの信徒達を理解すること」では、前章を踏まえたうえで、同教団における神の認識の会得に際しても、イスラーム諸学における教授法と同じく、直接的な師弟関係を通じた知の伝達の重要性が明らかにされる。信徒達は師の不在の状況下では、知識を得ることはできず、シャイフ達も弟子達から信用を得ることができなければ、教育者としての資格を失う。それ故に、シャイフ達が弟子に神の認識を教授することは、より同教団内の信徒達の知識を深化させるとともに、師弟間の信頼性を高めることにも結びついた。またシャイフとその弟子達は時に経済的・社会的な懸念材料が互いに共有される際に、積極的な話し合いを通じてその行為基準を決定づけることもあったとする。

第6章「伝統的学問実践の適応」では、西洋との邂逅のなかで、西アフリカにおける伝統的なイスラーム諸学の教授法の変化について論じられる。改革主義者達は、西洋的な近代学校のように合理的なカリキュラムに沿った教科書を用いて教育活動を行った。それと対照的に、伝統主義者達は、師から弟子へと直接的に受け継がれる伝統的な教授法に固執した。イブラーヒーム・ニヤースは、伝統主義者と同じように、当該地域の伝統的な師弟間の直接的な教授法に重きを置いたが、一方でその限界点も見据えていた。そこでイブラーヒーム・ニヤースは、西洋的な近代教育と当該地域の伝統教育を組み合わせることで、時代状況に合うように伝統教育を適応させるに至った。

第7章「神の認識とイスラーム諸学の復興」では、前章を踏まえたうえで、神の認識を求める信徒達の待望の声が、西アフリカで重要視されていた伝統的なイスラーム諸学——マールク学派法学、クルアーン解釈学、秘教学など——の再解釈を促した。西洋的な近代教育の浸透とは裏腹に、当該地域における学問伝統の再活性化が引き起こされたことは注目に値する。

第8章「イスラームとアフリカの脱植民地化——コミュニティの連携と特徴」では、アフリカ独立以前からイブラーヒーム・ニヤースが歿する直前までの期間が取り上げられている。特に、同期間の反植民地運動の際にムスリム・アイデンティティが強化された点が論じられる。アフリカ独立前夜から、イブラーヒーム・ニヤースは宗教的指導者というよりも政治的指導者の性格が色濃くなっていく。1962年にジュネーブで創設されたイスラームの布教を目的に掲げる国際的な非政府組織であるイスラーム世界連盟の副総裁も務めた。イブラーヒーム・ニヤースの積極的な国際舞台での活動は、同教団の鍵概念である神の恩寵を反映したものであると著者は指摘している。そして終章では、本書全体の議論を総括したうえで結論を述べている。

以上のように、本書の特色は以下の三点にまとめられる。①シャイフと信徒間の内面性をより明らかにしたこと、②イスラームの学問伝統やムスリム・アイデンティティに対するスーフイズムの関係性を整理したこと、③脱植民地以降のイスラーム知識人の伝統の順応と拡大のメカニズムにも考察を加えていることである。そのいずれの点においても、西アフリカ・イスラーム研究でこれまであまり垣間見られてこなかったことである。それ故、本書はそうした研究の空隙を埋めたために、十分に評価することができよう。

だが一方で、本書の議論が今後のイブラーヒーム・ニヤースを対象とする西アフリカ・イスラーム研究に残した課題が二点挙げられる。ひとつは、口頭伝承資料における偏向の問題である。確かに、本書は西アフリカ地域内部で書かれたアラビア語資料群を緻密に分析したうえで、フィールドワークにより蒐集した多数の口頭伝承資料によって文字資料では不透明な事実を補完するなど、他地域と異なり文字資料に限りのある当該地域において史的研究をより一層前進させたといえる。イブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフイー教団の教団本部は、セネガルのカオラク州メディーナ・バーイ地区に位置しているが、この教団の国別の信徒数を見てみると明らかなように、ナイジェリアの信徒数は西アフリカ内部の信徒数のなかでも群を

抜いている。またセネガル国内には、他のティジャーニー教団の諸分派も存在している。それにも拘らず、本書で取り上げられている口頭伝承資料の多くが、同教団本部の周辺に位置する宗教指導者や信徒達を媒介したものに限定されているのには聊か疑問が残る。このような口頭伝承資料の偏向の問題は、口頭伝承資料それ自体の信頼性が揺らいでしまう可能性があり、史料批判が十分に為されているとは言い難い。本書は西アフリカ・イスラーム研究における史的研究のひとつの到達点を示唆すると同時に、その困難さをも示している。

もうひとつが、イブラーヒーム・ニヤースを祖とする教団の特徴として取り上げられている神の認識へと至る修行階梯が果たしてこの教団の特徴と言えるのかどうかという問題である。広汎なイスラーム世界において、神の認識を求める信徒達の存在はさほど珍しいことではない。では、何故タルビヤが同教団の特徴として考えられてきたのだろうか。おそらく上述した二つの先行研究においても言及されているタルビヤが、研究者達によって過度にその特異性が強調されたことで、ひとつの「神話」を生み出した可能性は捨てきれない。同時代知識人達のタルビヤも比較検討するなど再度検討されるべきであろう。

イブラーヒーム・ニヤースは、1929年に自身の教団を設立して以来、西アフリカ各地へと布教活動を展開してきた。20世紀のイスラーム世界において、宗教的指導者であると同時に政治的指導者の役割を担ったイブラーヒーム・ニヤースは、イスラーム復興を最もよく体現した人物のひとりであった。それ故に、西アフリカにおけるスーフィズム・タリカ復興現象の実態の解明において、イブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団を研究することは重要な意味合いがあるのではなかろうか。他の西アフリカのイスラーム知識人に比べ、イブラーヒーム・ニヤースを対象とする研究蓄積は十分に為されているとは言えず、未開拓の研究分野ともいえる。著者 Zachary Valentine Wright を含め研究者の今後の研究が期待される。

<参考文献>

- Hill, Joseph. 2007. "Divine Knowledge and Islamic Authority: Religious Specialization among Disciples of Baay Nas." PhD dissertation Yale University.
- Seeseman, Rüdiger. 2011. *The Divine Flood: Ibrāhīm Niassé and the Roots of a Twentieth-Century Sufi Revival*. New York: Oxford University Press.

(末野 孝典 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Daniel Byman. 2015. *Al Qaeda, the Islamic State, and the Global Jihadist Movement: What Everyone Needs to Know*. New York: Oxford Univ Press. xii+284 pp.

1990年代の冷戦終結と湾岸戦争以降、9.11事件や「イスラーム国」(以下、IS)という新たな脅威が登場し、欧米は反テロ政策を強化し、中東への軍事介入を加速するとともに、国内においてテロへの警戒からムスリムへの監視を強めるようになった。アラブの春によって中東の民主化の可能性が示されたかに見えたが、独裁政権打倒後に安定した国家は生まれず、内戦やテロが中東を支配する状況が続いた。

9.11事件以来、ジハード主義組織に対する研究が盛んとなったが、依然としてテロ事件や欧米の軍事行動が中心であり、ジハード主義組織の言説やイスラーム主義者に対する批判についての研究は多くなかった。また、一般の読者層には、9.11事件やアラブの春、ISの勃興といった際立った事件の前後の状況が知られていないことも多い。

本書は、「すべての人が知るべきこと」と銘打つ通り、アフガン侵攻に始まるアル=カーイダの前史や湾岸戦争から9.11までのアル=カーイダの活動、9.11事件からISの登場に至る一般読者の知識の空白を埋める内容となっている。さらに、ジハード主義組織の目標や戦略、反テロ政策のみならず、ジハード主義者の思想をも取り扱い、アル=カーイダやISをジハード主義運動全体の中に位置づける試みであり、グローバル・ジハードの実態を把握するために必読の書である。

以下では、章別に概略を述べる。